

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-142	A-152	20-405	独立行政法人国立病院機久里浜医療センター 真栄里 仁 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター 松下幸生
題名 (原題/訳)			
Associations Between Psychiatric Disorders and Alcohol Consumption Levels in an Adult Primary Care Population プライマリーケアでの精神障害とアルコール消費レベルの相関			
執筆者 Palzes VA, Parthasarathy S, Chi FW, Kline-Simon AH, Lu Y, Weisner C, Ross TB, Elson J, Sterling SA.			
掲載誌			
Alcohol Clin Exp Res. 2020 Dec;44(12):2536-2544. doi: 10.1111/acer.14477. Epub 2020 Nov 5.			
キーワード			PMID
アルコール消費量レベル、アルコールスクリーニング、プライマリーケア、精神科合併症			33151592
要 旨			
<p>背景：不健康な飲酒に精神障害の合併が多い一方で、精神障害とアルコール消費レベルの相関については殆ど知られていない。多様な精神障害者に合併した不健康な飲酒のレベルを理解することは、個々に合わせた介入の有益な洞察となるであろう。</p> <p>方法：2014年から2017年にかけてカイザー・パーマネンテ北カルフォルニアで2,720,231名のプライマリーケアの患者に対し不健康な飲酒のスクリーニングテストによる横断調査を行った。調査には電子カルテのデータを用いた。米国立アルコール乱用・依存症研究所のガイドラインに基づいてアルコール消費レベルは、“飲酒なし”、“低リスク飲酒”、“不健康な飲酒”に分けられた。更に“不健康な飲酒”は、“一日の上限のみ超過”、“週の上限のみ超過”、“一日と週の両方を超過”のグループに分けられた。社会人口学的特性と健康に関連した特性を補正したうえで、過去1年の8つの精神疾患（うつ病、双極性気分障害、不安障害、強迫性障害、統合失調症、統合失調感情障害、神経性無食欲症、神経性大食症）の既往とアルコール消費量レベルの相関について、多変量多項ロジスティクス回帰モデルを当てはめて解析を行った。</p> <p>結果：調査対象全体（女性53%、白人48%、平均年齢48歳（標準偏差18））では、精神疾患を有する群（摂食障害を除く）では、有しない群に比較して、低リスクまたは不健康な飲酒が、全く飲まない群に対するオッズ比が低くなっていた。飲酒群（n=861,427）では、うつ病や不安障害を有する群は、有さない群と比較して、週の上限を超過、一日と週の上限を超過のオッズ比が高く、神経性大食症の患者でも、一日と週の上限を超過のオッズ比が高くなっていた。</p> <p>結論：これらの結果から、推奨量を超えて飲酒する不安障害やうつ病、神経性大食症を有する患者では、更に問題が重篤化するリスクが増大することを示唆している。保健制度や臨床家は、これらの脆弱性のある集団が飲酒量を制限できるような支援を行うために、よりスクリーニングテスト、評価、介入を強化したほうが良いと思われる。</p>			